

脊椎手術解剖アトラス

菊地臣一 ● 編

〔評者〕飯塚秀明(金沢医科大学教授・脳神経外科学)

本書は、脊椎・脊髄疾患の外科治療を専門とする医師、およびそれを志す医師にとって、必須の書籍と思われる。編著者の菊地臣一先生が序文で述べているように、本書のコンセプトは、「脊椎・脊髄外科の臨床という art」と「解剖という science」の統合といえる。いうまでもなく、あらゆる手術の基本は、外科医が局所解剖を正確に把握し、そのうえで、病変に対する、手術体位を含めた適切な到達方法の選択が肝要である。特に、脊椎・脊髄手術におけるこれらの重要性は論をまたないであろう。

本書は、第1章で、まず「脊椎手術に必要な神経解剖」として、臨床解剖の重要性とそれに基づく神経症状の解説が述べられている。画像診断が格段に進歩したとはいえ、脊椎・脊髄手術に携わる外科医にとって、診断の基本は、神経学的所見に基づく責任病巣の把握であり、このためにもこの第1章は、全ての脊椎・脊髄外科医にとって極めて参考となるものである。

続いて、頸椎、胸椎、腰・仙椎疾患に対する、各種の到達法と手術手技が詳細に解説されている。それぞれの到達法において、手術

適応、手術体位の基本、皮膚切開、到達法が、豊富な局所解剖写真とともに、具体的にわかりやすく解説されている。脊椎・脊髄手術で用いられているアプローチがほぼすべて網羅されており、手技のステップごとに、詳細な局所解剖写真を用いて解説されている。胸椎での前方到達法では、胸腔ドレーンの挿入に関する留意点をも解説しており、実際の臨床現場で役に立つように工夫されている。さらに、腰・仙椎では、特殊な手技として、各種固定術や内視鏡下手術・腹腔鏡下手術まで11の手技について手技上の留意点やポイントなども含めて解説されている。本書の特徴として、それぞれの術式の解説の後に、エキスパートによるその術式におけるポイントや手術のコツ(Pearls and Tipsを含めて)が述べられており、それぞれが極めて参考になる解説となっている。

編著者の菊地先生が、腰・仙椎の傍正中アプローチ(Wiltseのアプローチ)におけるコメントで述べている、「navigation systemの導入により、三次元的解剖の把握は容易になった。しかし、術者の頭の中に、局所での神経根と周囲組織との相互関係が入っている」といえないのでは、手術時間と



合併症発生の危険が格段に違う」(p.126)は、至言である。

本書は、この領域の専門医をめざす若手医師にとって、ぜひともアシスタントに入る前に読破することを望みたい。また、専門医として第一線で脊椎・脊髄疾患の外科治療に励んでいるベテラン医師にとっても、今一度、自分の手術手技を振り返るために参考とすることを薦めたい。

A4・頁196

2017年5月

定価：本体16,000円＋税

[ISBN978-4-260-03044-1]

医学書院 刊